



イラストでたどる石州街道 22 渡川繰船永代録

渡川城から1.5km進むと石州街道は渡川橋に差し掛かる。嘉永六年（1854）八月、この橋の200m上流部に船渡場が設けられた。それまで洪水のたびに橋が流失し、復旧するまで通行人が難渋していたのを見兼ねた庄屋・伊藤市右衛門が自ら発起人となり、近隣の有力者に計って、網を対岸に渡して安全に航行の出来る繰船を設置したのである。その完成を記念して建てられた石碑には寄付者名を後世に伝えるため芳名録が刻まれており、その中には郡内外の多くの名前があることから石州街道の重要性と繰船が如何に期待されていたかが伺われる。昭和八年、コンクリート橋に架け替えられると、この石碑は現在地に地蔵尊とともに移設された。

文イラスト 古谷眞之助



実は、渡川永代録については本文に書いている以上のことはよく分からないので、今回は歴史とは全く別のチェーンソーアートについて書いてみることにする。と言うのも、この石碑を過ぎてしばらく街道沿いに進むと、左手に突然、山間の村にはちょっと相応しくないログハウスが現れて、そこにたくさんの動物作品が無造作に並べてあるのに出くわしたからである。(小写真上)調べてみると、どうやらチェーンソーのみを使って丸太から動物たちやオブジェなどを掘り出す作家として有名な林隆男氏の作品のようである。氏の作品は「やまぐちゆめ回廊博覧会」のメインシンボルとして、かなり大型の「ぶちえーゆめはく」と銘打った作品が新山口駅に展示してあった。小写真下の説明看板を拡大してみると林隆雄作と確認できる。この作品は、今は道の駅「長門峡」に移設されているが、県内の他の道の駅にも氏の作品が多く展示してある。このログハウスの直ぐ側には、丸太や薪に使用すると思われる材木がうす高く並べられていたし、大きなご自宅にはストーブ用の煙突も見えた。改めて林氏の経歴を見ると、もう世界的なチェーンソーアーティストと呼んで全く問題のない受賞歴である。チェーンソーでかくも精緻に掘り上げるシーンを是非見てみたいと思ってネットで探したが、残念、動画はヒットしなかった。このレベルにまで到達すると、県レベルのイベントでもお呼びがかかって当然だろう。(2024.1.25 記)